［特集 調査報告］

韓国からドイツに渡ったガストアルバイターの移住と再移住

Migration and Remigration of Korean Guest Workers in Germany

浜崎桂子
Keiko HAMAZAKI

キーワード
ドイツでの韓国人ガストアルバイター、韓国南海（ナムヘ）ドイツ村、静かな移民、故郷（Heimat）とホーム（zuhause）
Korean Guest Workers in Germany, Namhae German Village in Korea, silent migrants, "home (Heimat)" and "at home (zuhause) "

Abstract: This research report focuses on Korean guest workers in Germany: the nurses and miners who emigrated from Korea to Germany in the 1960s and 70s due to economic and political instability in South Korea. However, despite the current importance of migrant integration in German society, Korean migrants are rarely discussed. This report aims to provide a brief overview of how previous research in German and English has analyzed the situation of Korean migrants, particularly nurses or care workers. In addition to the analysis of Korean guest workers as a whole, there is also research and oral histories on nurses that focus on the gendered conditions of migration. The research assesses the factors that seemed to enable Korean migrants to integrate successfully as 'silent migrants' through the interviews and their evaluation. However, the history of the Korean women's group clearly shows that they have not always remained voiceless, but have even won their right to stay through political activity.

After 60 years of labor migration from Korea to Germany, these migrants have reached retirement age. Therefore, investigating their retirement plans is an important area of research. In her documentary "Endstation der Sehnsüchte" (2009), Cho Sung-Hyung, a film director living in Germany, follows three German-Korean couples. The ex-nurses and their German partners moved to the "German Village" in South Korea after spending almost forty years in Germany. The film explores how the concepts of 'home' (Heimat) and 'at home' (zuhause) can be understood in an age of global migration.

1. 韓国からドイツへ、そしてドイツから韓国へ

ドイツで活動する韓国出身の映画監督Sung-Hyung Cho（1966生）は、彼女の2作目となるドキュメンタリー映画『憧れの終着駅』（Cho, 2009）で、韓国の南部、慶尚南道南海郡に位置する「ドイツ村」（독일마을）で生活する3組の夫婦の日々の暮らしを映像におさめている。ドイツ人の夫とここで暮らす韓国人の妻たちは、映画の冒頭で歴史的映像とともに示されるように、1960年代から1970年代にかけて韓国から当時の西ドイツに派遣された看護婦[2]であった。その後40年近くをドイツで生活した彼女たちは、夫とともに、韓国のこのドイツ村に再移住したのである。

ここで老後の生活を送る彼らの、韓国からドイツへ、そしてドイツから韓国へのトランスナショナルな移住には、それぞれの理由と物語がある。夫の一人Arminは、「妻は37年間ドイツで生活し、私たち夫婦は34年一緒にいる。仕事をリタイアする年になって、妻は昔の故郷へ、そして私は新しい故郷に移り、残りの20年か25年を韓国で生活してもいいじゃないか、と考えた」と、韓国への移住を決めた経緯を話す。その妻Young-Sookは、「私は韓国で生まれただけで、考え方は完璧にドイツ的」、「37年間完全にドイツに適応して生きてきた」と誇らしげに語る。彼女は、高校時代のボーイフレンドが炭鉱夫として渡独したことを耳にして、自分も行こうと看護婦募集に応じたのだという。一方、Chun-jaがドイツで看護婦として働くことを決めたのは、二人の子どもたちに良い生活をさせたいという経済的な理由であった。しかし、出発直前に夫に離婚を言い渡された彼女は、韓国に戻らずにドイツで生き抜いていくことを決意したと語る。普段は穏やかに、また朗らかに話すもう一人の元看護婦Woo-zaは「当時は、とにかく韓国から逃げたかった。すべてを捨てて飛び出したかった」と、声に力を込めてドイツへの移住の理由を話す。家の長男である男と結婚したが、生まれた子どもが男子ではなかったことで婚家に疎まれたうえ、夫には別の女性がいることがわかったとき、ドイツへの看護婦派遣に応募したという。

彼女たちそれぞれの移住の背後には、労働移民という国際的な現象があり、そして移住先に定住した移民たちの高齢化という現象がある。本稿は、韓国からドイツへの移民たちの移住の経緯と現在について、ホスト社会の言語であるドイツ語、および英語で発表された先行研究を調査したものである。最終章では、「Heimatfilm（郷土映画）」とCho自身がカテゴライズしているこの映画に描かれる「Heimat（郷土／故郷）」について論じることとしたい。

2. ドイツにおける韓国系の移民たち

まず、韓国から当時の西ドイツへの労働移民派遣の経緯について確認したい。炭鉱労働者については、韓国と西ドイツの間で1963年に二国間協定が締結され、1977年にこの協定が停止されるまでに約8,000人が派遣された（Choe & Daheim, 1987, S. 10）。看護婦については、ドイツ病院協会（Deutsche Krankenhausgesellschaft）と、韓国側のKODCO（Korea Overseas Development Corporation）との間の協定を韓国政府が閣議承認するという形で派遣が決定され（Yoo, 1975, S. 10f.）、1971年から1977年の間に約10,000人（Choe & Daheim, 1987, S. 10）が渡独した。この協定締結前後にも、個別の契約などで派遣された者もおり、看護婦については、協定以前に500人程度（Yoo, 1975, S. 12）がドイツで働いていたと想定されている。

この労働者たちの派遣の背景には、韓国、西ドイツ双方の事情があった。韓国は、日本の植民地統治による社会基盤の崩壊、朝鮮戦争による物的および人的被害によって困窮した経済を立て

直すべく、1960年代には農業国から産業国への構造転換を目指しつつあったが、経済援助を必要とする開発途上にあり、高い学歴を身につけた新中間層も、また農村の貧困層も定職に就くことが難しい高い失業率が政治課題であった（Park, 1997, pp. 7-12）。1962年には「海外移住法」が施行され、海外への移住を推し進めることで、国内の高い失業率や貧困を減じ、移住者による国内家族への送金によって外貨を獲得することが目指された。

一方、当時の西ドイツは労働力不足を解消するために、複数の国との二国間協定により単純労働に従事する外国人労働者を呼び寄せていたが、韓国との契約は、韓国への経済援助、技術援助の一環という名目で締結された。また、ドイツ国内では看護士・看護婦などの医療従事者の不足が深刻になり、フィリピン、インドなどと並んで、韓国からの看護婦を雇用、先述のドイツ病院協会がその受け入れを管理するようになり、韓国との正式な協定による受け入れを開始したのである。

2.1. ドイツの労働移民

外国からの労働移民の受け入れは、現在のドイツが名実ともに「移民受け入れ国」となる重要な契機ともなった。第二次世界大戦敗戦後、「奇跡の経済復興」と呼ばれる発展を遂げるようになっていた当時の西ドイツ（ドイツ連邦共和国）では、炭坑や製造業において労働力不足が深刻となり、他国から労働者を募集するようになった。1955年にはイタリア、1960年にはスペインおよびギリシャと当初は南欧諸国から、その後1961年にはトルコ、1963年にはモロッコそして韓国と労働力募集についての二国間協定を結んでいる。そしてオイルショックのため1973年に外国からの労働者募集を停止[3]するまで、チュニジア、ユーゴスラヴィアなどとも二国間協定を締結し、20年弱の間に約260万人の「ガストアルバイター（Gastarbeiter）」がドイツにやって来ていた（Hinz-Wessels, 2018）。

当時ドイツで用いられたこの「ガストアルバイター」という概念には、移住してきた労働者（Arbeiter）を、いつか帰る「客（Gast）」として見ていたことが端的に表れている。実際、この協定によって入国する労働者たちには、多くは1年～3年の契約終了後は帰国することが期待されていた。しかし、労働力を必要に応じて調整しようとするこのいわゆるローテーションシステムは想定どおりには機能せず、ドイツに引き続き滞在することを選択した労働者たちも少なくなく、滞在期間が長くなるに従い、故国から家族を呼び寄せ、あるいはドイツで新たな家族を得るなどして定住していくようになる。1973年の募集停止後、また1983年、ドイツ政府が帰国奨励金支払いを含む帰国促進措置を取ったのちも、特に故国での政治や経済状況が不安定であったトルコ出身者の定住者数は増加した[4]。

その後、ドイツ政府が正式に「移民受け入れ国家」であることを認めるのは21世紀になってからのこと[5]であるが、自治体レベルでは遅くとも1980年代初頭から、定住する移民たちの社会統合や多文化共生のための取り組みが行われてきた。そこでは、市民団体や労働組合、移民たちの社会活動団体が大きな役割を果たしたほか、教育機関や研究機関においては、ドイツ語教育をはじめとする移民の社会統合教育、ホスト社会をも対象とした異文化間教育について調査、研究が蓄積されていった。これらの研究や調査においては、最も人数が多いトルコ出身の移民、あるいは文化差が大きく統合に向けての課題が多いとされるイスラム文化圏からの移民が対象になることが多い。

このようなガストアルバイター移住の歴史は、ドイツにおける公的な歴史記述において、戦後の経済復興、またさらにその後のドイツが「移民受け入れ国」となっていく経緯として必ず言及

される。たとえば、首都ベルリンにあるドイツ歴史博物館（Deutsches Historisches Museum）、旧西ドイツの首都ボンにある連邦共和国史博物館（Haus der Geschichte der Bundesrepublik Deutschland）の展示、両博物館および連邦公文書館による、ドイツの歴史を資料とともに包括的に確認できるウェブサイトLeMOでも、概略的な説明や関連する展示物を閲覧することができる。しかし、ガストアルバイターについての一般的な記述において韓国の名前が挙がることは皆無[6]と言ってよい。また、「移民の統合問題」というテーマが議論される際にも、韓国系の移民たちが議論の対象となることはほとんどない。ドイツ移住記録センター博物館（Dokumentationszentrum und Museum der Migration in Deutschland, DOMiD）が、韓国からドイツへの移住の歴史と現在についての研究プロジェクト成果を、『未知の多様性』（Chan-Gusko u.a., 2014）というタイトルで出版したのも、韓国からの移住者の存在が、これまでドイツではほぼ「未知」であったことの表れである[7]。

2.2. 静かな移民？

ドイツにおいて、韓国系の移民たちが可視化されてこなかったことについては、先行研究でもいくつかの理由が指摘されている。一つは、人数が少なく、端的に統計としてマイノリティーの中のマイノリティーであるという点である。韓国からの労働移民の総数が、協定期間前後に派遣された労働者や看護婦の存在を鑑みて約2万人だと想定すると、ドイツに移住したガストアルバイター推定総数は約260万人、最多のグループであるトルコからの約87万人（Luft, 2014）と比較しても、確かに韓国からの移民の数は少ない。

次に挙げられるのは、韓国系の移民たちが、いわゆる「社会統合」、すなわちホスト社会への適応を達成しているように見えるという点である。Hartmann（2016, S. 146-147）は、韓国からの移住者たちとその2世たちが、「ネガティブな記事になったりしない」人々であり、「静かな社会統合（lautlose Integration）」を成し遂げていたと述べている。Kim（1986, S. 31）は、1世たちの社会的立場と子どもの教育に対する姿勢を分析したうえで、韓国からの移民たちの特徴を次のように述べている。一つは、炭鉱労働者、看護婦として入国した彼らが、他国からのガストアルバイターと比較すると高学歴であったという点である。ドイツの看護士は大学卒業資格（より正確にいえば大学入学資格）が不要な職種であるのに対して、韓国での看護士教育では専門的理論の修得も行われており[8]、渡独した看護婦たちは、少なくとも高等学校卒業レベル、あるいは大学卒業レベルの学歴をもっていた。また、炭鉱労働者として渡独した者たちの多くも、当時学歴をもちながらも韓国で十分な収入を得られなかった層で、大学卒業者も少なくなかったという。Kim（1986）がインタビューした在独韓国人への調査によれば、回答した女性の70％近くは高卒、14％は大卒の学歴を、男性については60％が高卒、19％が大卒の学歴を移住前にもっていた。韓国からの労働移民同士で結婚している夫婦では、より安定的な就業資格を得ていた妻の多くが看護婦としての仕事を継続しており、妻のほうが収入の多い家庭も珍しくなかったという。このように、夫婦ともにドイツでも中流以上の収入を得る家庭の割合が高い韓国系の移民たちは、教育にも熱心で、彼らの子どもたちのドイツの学校への適応にも大きな問題は見られないとされたのである。確かに、韓国系移民の大学進学率は推定約70％（Coi & Lee, 2005, S. 832; Garz, 2014, S. 38）と、ドイツ全体の大学進学率58％（Statistisches Bundesamt, 2022による2014年のデータ）を上回る。

また、韓国系の教会とそのコミュニティが重要な機能を果たしたほか（Hartmann, 2016, S. 137）、女性団体、文化交流団体なども含め、100を超える韓国系の団体があって（Yoo, 1996）、

移民たちの社会的活動のよりどころ、生活上の問題の解決の場となっていることも指摘されている。たとえば最大の移民グループであるトルコ出身者の場合、子どもの教育や女性の社会統合について彼ら自身の市民団体の取り組みも多数あるものの、彼らの「統合」はホスト社会が取り組むべきテーマであると認識されている。そのことと比較すると、Hartmann（2016, S. 138）がいうように、確かに、韓国系の移民たちはこれらの問題を「自分たちで解決し」、「社会の問題にはしなかった」のである。元炭鉱労働者の父と看護婦の母をもつ在独2世であるMartin Hyun（2008, S. 23）は、アメリカ留学中に見聞きした在米アジア系移民についての議論も踏まえ、「控えめで、従順で、和を乱さない」というアジア人についてのステレオタイプが、韓国系移民は問題を抱えていないという間違ったイメージを強化していると指摘している。そして、彼自身やその他の2世の人々の体験を語ることで、一方では、社会統合を成し遂げたモデル・マイノリティーとされながら、外見から他者化され、アジア人へのステレオタイプに基づいた日常的な差別に対峙せざるを得ない彼らの「問題」を可視化しようと試みている。

2.3. 声を上げる韓国人看護婦たち

Hyunの親の世代が西ドイツで働き始めた1960年代、ガストアルバイターを呼び寄せながらもまだ多文化政策や移民政策が実施されていなかった社会において、韓国からの労働者たちの仕事や日常に困難が多かったことは想像に難くない。炭坑での過酷な肉体労働をする男性たち、そして、病院や老人ホームでケア労働、感情労働を行う女性たちは、それぞれの困難や問題に直面していた。先行研究においても、韓国からのガストアルバイター全般についての社会学的調査（Kim 1986; Choe & Daheim, 1987; Coi & Lee, 2005, Roberts 2012; Hartmann 2016）のほか、炭鉱労働者を対象とした分析（Nestler-Tremel & Tremel, 1985）やオーラルヒストリー（Lee, 2021）、また看護婦を対象とした研究（Yoo, 1975; Stolle, 1990; Roberts, 2010, 2017a, Ahn 2020）やオーラルヒストリー（Berner u.a., 2006）があり、それぞれの職種、アジアというエスニシティーと交差するジェンダー独自の問題に注目した分析も行われている。以下では、韓国からの看護婦たちに焦点を当てた先行研究を参照しつつ、「静かな統合」を果たした移民だとされてきた彼女たちが、抵抗する主体でもあったことを確認したい。

ドイツで「移民の社会統合問題」がテーマになるとき、女性の教育、職業の機会の確保、そして彼女たちの自由といったジェンダーにかかわる問題は最重要テーマの一つである。「静かな移民」とされた韓国から移住した女性たちは、比較的高い学歴と看護婦あるいは看護助手の職業資格を身に着けていて、自分自身が労働契約で渡独し仕事に従事していたという点、また結婚後も看護婦の仕事を継続するケースが大半であることが特徴的である。

彼女たちがドイツでの看護婦募集に応募した理由は、経済的なものに限定されてはいなかったことがわかっている。Yoo（1975）のアンケート調査によれば、538人のインフォーマントのうち約40％が経済的な理由を挙げているが、その他、ドイツでさらに勉強をして資格を取得するという理由（約22％）や、国外、ヨーロッパやドイツへ行くことへの好奇心（約45％）も、多くの女性たちの応募動機であった（Yoo, 1975, S. 159-184）。また、Roberts(2017a, p.198）も指摘するように、家父長的価値観が強い社会での抑圧的な状況から逃れるため、自分の職を生かした海外滞在のチャンスを選択した女性たちも少なくない。Yoo（1975）の調査でも、30％近くの女性たちは、家族の問題が理由だと答えている。例えば、望まない結婚から逃れるため、または夫の生活力の無さから、あるいは映画に登場するWoo-zaのように婚家での虐げや夫の浮気が理由

で離婚し、当時の韓国社会での離婚した女性へのスティグマから自由になるために、ドイツへの移住を選んだのである（Yoo, 1975, p. 174）。

看護士不足が医療現場の問題となっていたドイツでは、この韓国からの看護婦たちの到着は歓迎された。当時のドイツの全国紙や地方紙をRoberts（2012, pp. 62-67）が分析して指摘しているように、報道では、アジアからのケアワーカーの女性たちを、エキゾチックで献身的、心優しく勤勉、いつも笑顔の天使たちといった表現で伝え、彼女たちをステレオタイプによって他者化し、看護という機能に最適な労働力として記号化していた。仕事の現場で彼女たちの労働は重宝された一方、ドイツ語能力が十分でなく、文化差もある彼女たちが仕事をするための環境は万全ではなかった。インタビューやオーラルヒストリーの彼女たちの発言からは、言葉の問題や異なる食文化の問題、また「献身的な」アジア女性に職務外の雑用も含めた仕事が求められていた状況に苦労していた様子が伝わってくる。例えば、Ahn（2020, p. 43）がインタビューをした元看護助手は「言われていることがわからないので、せめて笑顔で応答した」と語り、メディアで「笑顔の天使」というイメージが作られた裏には、言語の問題もあったことがわかる。一方、そもそも外国人、とくに見慣れないアジア人に対するドイツの医師や看護師の不信感を払拭したのは、彼女たちの専門的なスキルであったという自負もインタビューには表れている（Ahn, 2020, p. 47）。「心優しく」、「献身的な」というアジア人女性に対するステレオタイプでもある評価については、韓国人看護婦たち自身が、それを自分たちの強みとして、また職業的倫理として実践していたとみられる例もある。夜勤中に患者とおしゃべりする時間を取ることで、患者が気持ちよく過ごすことができるようにしていたと語る元看護婦は、「患者たちも、私たち（＝韓国人の看護婦）は親切だと思っていて、医者に質問できないことを私に質問してきた。ドイツ人の看護婦は、私たちみたいには患者に応答しないから」（Ahn, 2020, p. 43）と語っており、細かな配慮をするという自分の仕事の仕方に誇りをもっていたことが見てとれる。このような回答をインタビューから導き出しているAhn（2020, p. 53）は、元看護婦たちに同僚や患者との関係性を問いかけながら、彼女たちが、自分たちの専門的スキルや患者とかかわる姿勢などを社会資本として発揮し、自分たちへの評価に結び付けることができるガストアルバイターのエージェンシーを持っていたと分析している。つまり、「静かな移民」、「笑顔の天使」とされる韓国からの看護婦たちは、時に差別や不公正な扱いを甘受しながらも、自分たちなりの仕事の方法や文化への誇りや尊厳をもって実践していたと解釈できる。

そして、彼女たちが決して「静かな移民」ではなかったことは、在ドイツ韓国女性グループ（Koreanische Frauengruppe in Deutschland）の活動に見ることができる。このグループも編集に加わっている『家で』（Berner u.a., 2006）には、このグループのメンバーである女性たちのオーラルヒストリーがおさめられている。3年の契約で来独した看護婦たちの多くはその後も契約更新で仕事を続けていたが、1977年の協定停止によって、滞在許可と労働許可が停止され、帰国を強制されるケースが散発した。生活の基盤はすでにドイツにあり、また韓国での再就職も難しい状況にあった彼女たちが、ドイツに滞在する権利を求める活動を始めたのがこのグループの始まりである。西ドイツの各地にいた看護婦たちがネットワークを作り勉強会や講演会を行ったほか、西ベルリンでは、ビラを配布して彼女たちの状況を市民たちに周知し、一万筆を超える署名を集め市政府に要求を提出した。ドイツのメディアもその活動や主張について報じるなど世論を味方につけたこの運動は成果を上げ、ベルリンでは1977年に、その他の州でも1978年までに、5年以上看護婦として勤務した場合は滞在許可、8年以上勤務した場合は滞在権を得ることになった。そして渡独した看護婦たちの半数近い約4,000人は、ドイツに残ることを選択したの

である（Berner u.a., 2006, S. 10-11）。

『家で』に収録されている彼女たちの語りには、この時の滞在許可獲得という成果への誇りが表れている。Roberts（2010, p.13）が社会言語学的視点での分析から指摘しているように、ここに採録されているオーラルヒストリーは、彼女たちが、この運動を通して自分たちの要求を言葉にすることを学び成長するプロセスとして語られる。ドイツでの仕事を始めた当初の彼女たちは、文字どおりドイツ語という言葉を持たない存在であった。その初期のころの苦労話として複数の女性が語っているのは、スキルに見合わない清掃などの業務を指示され、言葉の問題もあって異論を唱えることもできず作業をこなしたというエピソードである（Berner u.a., 2006, S. 85）。本来彼女たちには、6カ月のドイツ語講習が準備されることになっていたが、勤務した地域や病院によってはこれが必ずしも実施されていなかった。しかし、『家で』に登場する女性たちは、授業料を自分で支払うこともいとわずにドイツ語の修得に励んでいる。Choの映画に登場したYoung-Sookも、「言葉が通じないと一人前の人間として扱われない」こと、同僚とも患者とも意思疎通の必要があったことから自費でドイツ語を学んだと話している。患者との人間的な関係が求められるケア労働において、同僚や患者から信頼を得るために、彼女たち自身が言語の修得の必要性を認識して努力をしていたことがわかる[9]。

このように徐々に「言葉」を獲得していった彼女たちは、滞在許可延長が容赦なく拒否される状況について勉強会などで互いに議論をするなかで、ドイツにとって「自分たちは労役用の動物」（Berner u.a., 2006, S. 19）にすぎなかったことに気づき、「ドイツが必要としていたから私たちはやってきた。（…）私たちは商品ではない」（S. 18）というスローガンを掲げて通りに出て署名を集めるようになる。『家で』の冒頭に掲載されている当時を振り返る4名の対話の中で、Kook-Nam Cho-Ruwweという女性は、最初は緊張のあまりふるえながら人々に声をかけたが、署名を一つ集めるごとにその緊張が解け、楽しみさえ感じるようになったと言い、その経験は「成長のプロセス」（Berner u.a., 2006, S. 19）だったと語っている。冷戦の前線であった韓国は、朴正熙大統領による維新体制下で言論統制が厳しい時代であり、それは、もう一つの冷戦の前線であった西ドイツに滞在する韓国人にとっても現実的な脅威[10]であった。政治的な活動に参加することで、韓国人のコミュニティーから「アカ」、「共産主義者」のレッテルを貼られ、危険視される恐れもあったのである（Berner u.a., 2006, S. 23; S.47）。それにもかかわらず、1970年代にドイツで盛んになっていた女性運動の影響を受けた彼女たちは、「市民的不服従」や「抵抗」という概念を身につけ、自分たちの権利を要求することが可能であり、そして必要であることを学んだのである（Berner u.a., 2006, S. 19-20）。この経緯から、韓国からのガストアルバイターたちは、決して、抵抗の声をあげることなく、従順にその立場に甘んじていたわけではないことがわかる[11]。特に、現在に至るまで幅広く人権問題や女性問題などについて学習会などの活動を継続している[12]この韓国女性グループは、『家で』の編集への参加をはじめ、研究調査への協力（Stolle, 1990など）も通して、彼女たちの声を発信することにも積極的である。またそのような活動において、自分たちがドイツにやってきた理由、韓国から西ドイツへの看護婦の派遣についても世界の構造の問題として批判的に考察している。Cho-Ruwweは、医療体制が崩壊寸前であった西ドイツに、より専門性が高い韓国の看護婦を呼び寄せた政策は「逆方向の経済支援」だったというアピールを繰り返しおこなっている（Koreanische Frauengruppe in der BRD und Berlin West, 1990, S. X-XI）。

2006年に出版された『家で（zuhause）』というタイトルのこのオーラルヒストリーには、ドイツの地に生活の場を築き、社会問題にもコミットしている韓国女性グループの彼女たちが、故国

／故郷（Heimat）への思いをかかえつつも、現在の生活の場を自分たちの居場所（zuhause）にしていったその過程を語るストーリーが集められているのだといえる。

2023年は、韓国とドイツの外交関係締結140周年、そして韓国から西ドイツへの炭鉱労働者派遣の協定締結から60 周年となる。仕事をリタイアし、子どもたちも自立した年齢になっている移住1世たちは、このままドイツで生を全うするのか、故国へ帰るのかという選択の間で迷うことになる（Ahn, 2019）。高齢になった移民の看取りという課題についても、韓国出身の元看護婦が自らホスピスを立ち上げて取り組んでいる。1972年に看護婦としてドイツに移住し50年以上滞在しているKim In-Sunは、2005年に設立したホスピスを「インターカルチュラル・ホスピス」として運営し、韓国を始め、アジアを中心としたさまざまな国出身の移民たちが、母語でケアを受け、また可能であれば故国に一時帰国し心の整理をしたうえで、ドイツの自宅で人生を終えることができるような支援を行っている[13]。

3. トランスナショナルな「故郷（Heimat）」と「ホーム（zuhause）」

一方、冒頭で確認した映画『憧れの終着駅』に登場した3人の元看護婦は、故国に帰国することを選択した。帰国を検討する元ガストアルバイターたちは、故国に懐かしさや安らぎを見出しながらも、長年のドイツ生活で培った自分の生活スタイルや価値観をもって、40年近く離れている間に大きく変化した韓国社会、家族や友人との関係にあらためて適応できるかどうかという不安も抱えている（Ahn, 2019, pp.169-173）。そのような声を聞いた元南海郡郡知事のKim Du-Kwanは、当時貧しかった韓国に外貨をもたらし現在の経済繁栄の礎を築いた元看護婦と炭鉱労働者の犠牲と貢献への感謝を謳い[14]、彼らが帰国し住む場所として南海郡ドイツ村の建設を計画した。土地や施設は国と郡が安価で提供する形で支援をした一方、個人の家は居住者自身の出資で建てられ、韓国でもドイツ的な生活を継続し、帰国者たちで集住したいとする居住予定者たちの要望を反映させた参加型プロジェクトとして計画が進められたという（Kim, 2021, S. 2-3）。

一方この計画は、過疎化、住民の高齢化が進む南海郡の人口・経済対策でもあり、この地区を観光資源として活用することも同時に計画され（Schulz Zinda, 2014, S. 216）、海に面した高台に赤い屋根と白い外壁のドイツ風の家が立ち並ぶこのドイツ村は、テーマパークでもある。Choの映画では、たびたび挿入される遠景からのショットで、この一角が地域の集落とは異なる景観であることが示される。また、時に傍若無人に個人の住宅の庭に入り込み写真撮影をする観光客たちと、彼らに困惑しつつ対応する住民たちの様子が印象的に映し出されてもいる。このような観光客に煩わされながらも、居住者たちは民泊として部屋を貸してもおり（Wee, 2018, pp.227-228）、街だけでなく住民個人にとっても、「ドイツらしさ」をアピールポイントとした観光業は経済的に重要なファクターともなっている。ドイツで40年近く生活した労働移民たちは、故国である韓国に「ドイツらしさ」を体現する家を自ら建て、自分たちとドイツ人の配偶者を「エキゾチシズムの主体」（Roberts, 2017b, p. 263）として作り上げることになったのだといえる。

ドイツに30年近く住む監督Sung-Hyung Choは、この映画を、彼女の一連の作品と同じく「Heimatfilm（郷土映画）」というジャンルに位置付けている。「郷土映画」とは、第二次大戦後の1950年代にドイツで多く製作され人気を得た映画ジャンルで、人々が「郷土／故郷（Heimat）」としてイメージする自然の風景を背景に、小さな町や村の素朴な住民たちが登場し、観客にノスタルジーを呼び起こすものが多い。この極めてドイツ的な映画ジャンルを名乗る韓国出身のChoの作品『憧れの終着駅』は、ガストアルバイターたちの故国である韓国の、ただし彼らの本

当の故郷ではないドイツ村を舞台に、ドイツ人の夫と韓国人の妻という異なる故郷を持つ者同士の夫婦を登場人物としたドキュメンタリーであり、決して自明のものとして明確に存在するのではない「故郷」のあり方を映している。ドイツの「郷土映画」において美化して描かれる郷土／故郷がフィクションであったとすれば、このドイツ村は、韓国でイメージされるドイツというフィクションから人工的に作られた実在の「野外博物館」(Schulz Zinda, 2014, S.217) であるのだが、ここに居住する帰国者たちにとっては、リタイア後の人生を過ごす生活の現実の場、さらにいえば、彼らが永遠に眠ることになる場所[15]である。

妻の一人Chun-jaは、「(ドイツにいる間は) 日が沈む時間になるとホームシックを感じていた。(…) でも今はドイツを故郷のように思う。戻ってきて故郷に住んでいるのに空虚な気持ち。6年前から韓国に住んでいるけれど、長く住めば住むほどドイツのことを想っている」と語っている。一方、高齢になってからドイツを離れ韓国に移住したその夫Williは、「すぐそばに海があり、裏には山があり、家の窓から海が見える、こんなところはドイツでは見つからない。(…) ここは故郷だとは言えないが、自分にとってそれは別に問題ない。生活には満足している」と語る。Chun-jaは、当時ドイツにわたった韓国人たちにとって「故郷を失ったのが私たちの悲劇」と語っているが、この映画の英語タイトル "From Home to Home" が示すように、自分の仕事と生活をつくり上げたドイツと、そして、建築計画にも参加して築き上げ、現在夫とともに暮らす韓国のドイツ村と、双方が彼女にとってのホーム (zuhause) だとも言えるのだろう[16]。

2章で、特に韓国女性グループの活動で確認したように、韓国からドイツへの移民たちは、長年、ホスト社会で生活するなかで社会的関係を構築し、自分たちのホーム (zuhause) をつくりあげてきた。渡独当初、故国韓国は遠く届かない郷愁の対象だったが、国境を越える移動が特別なものではなくなった現在は定期的な訪問が可能になり、多くの移民は故国にいる家族や知人たちとの関係を維持し (Bolzmann, 2013, p.69)、故国の社会や文化、家族や親族との接点があって (Ahn, 2019)、そこもまた――短期しか滞在しない場合も含め―― 一つのホームになっている。

映画『憧れの終着駅』の3人の元看護婦たちは、ドイツにおいても、また韓国においても――ホスト社会においては例えば外見から、そして故国においては「ドイツ村」というある種の「飛び地」でドイツ的な生活を送っていることから――他者であることを完全には免れないだろう。高齢になってからドイツ村に移住した夫たちは、観光客たちから「本物のドイツ人」という見せものとして他者化されてもいる。しかし、彼らもまた、おそらくは夫婦の子どもや孫も生活している[17]ドイツに持っている社会的関係は維持しているに違いない。つまり、彼らは、ホスト社会にも、そして故国にも、トランスナショナルに自分の居場所、ホーム (zuhause) を持っているのである。移民としての経験に強く影響された人生の晩年を生きる彼らに寄り添いながら製作されたこのドキュメンタリー映画で、Choは、人の移動――それも一回の一方向の移住ではなく、複数の往復の移動も含んだ――が珍しいものではなくなったグローバル化社会において、「Heimat (故郷／郷土)」もまたトランスナショナルに、同時に複数の場に存在し得ることを示しているのである。

註

1　彼女自身が、約30年間ドイツで生活する韓国からドイツへの移民でもある。また、彼女の母親は、看

護婦として数年間ドイツで仕事をしていたという。

2 例外なく全員が女性であるため、あえて性別を明示する「看護婦」という概念を用いる。

3 なお「技術援助」を謳っていた韓国との協定は1977年まで継続された。

4 協定停止翌年の1974年、約60万人だったトルコ人の就業者数は、1975年54万に減少しているが、トルコ人住民の数は、73年に89万人、74年に102万人と増加した（Herbert, 2001, S. 198f.）。

5 1999年国籍法の改正により、従来の血統主義が見直され、一定の条件で、ドイツで出生した場合の国籍取得が可能になったほか、2005年に制定された「移民法」（Zuwanderungsgesetz）によって移民の社会統合政策が連邦レベルで制定された。この「移民法」制定準備の段階で、政府の公式見解としては初めて「ドイツは事実上移民受け入れ国」であり、「これまで数十年にわたって移民を受け入れており、また移民はすでに定住している」ことが明言された。

6 例えばLeMOサイト上のHinz-Wessels（2018）に韓国との二国間協定についての言及はない。

7 さらに「未知」の移住グループとして、Chan-Gusko他（2014）でも扱われているように、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）からドイツ民主共和国（東ドイツ）へ移住した人々、その2世がいる。朝鮮戦争休戦の直後から、北朝鮮の戦争孤児や職業訓練生、留学生が派遣されており、1960年代初頭に本国に呼び戻されるまで東ドイツに滞在していた。東ドイツ女性と結婚し家族を築いていた留学生も帰国を強制され、家族との連絡は断絶していた。ドイツ統一後、旧東ドイツの資料が公開されたことから、家族たちは夫や父親についての情報を得ることができるようになり、またドイツと北朝鮮双方の赤十字社の媒介により、2013年、北朝鮮外務省が家族の北朝鮮訪問を認め（Schäfer, 2014, S. 67）、再会することができた家族もある。この家族たちについても、上述のSung-Hyung Cho監督がドキュメンタリー映画を製作している（Cho, 2015）。また、当時在北朝鮮ドイツ大使のSchäfer（2014, S. 67-68）によれば、2014年時点にも、北朝鮮からドイツへの留学生の派遣が行われているという。

8 1970年代当時の、韓国と西ドイツとの看護士養成のカリキュラムの違いの詳細については、Yoo（1975）に詳しい。

9 Cho（2009）に登場する3人の女性たちのドイツ語の発話能力には違いがあり、ほかの2名はすべてドイツ語で対応しているのに対し、1名は、夫とはドイツ語で会話をするがインタビューには韓国語で答えている。また、『家で』に語りが収録されている女性たちは、その創設期から女性グループのメンバーであることからも、韓国からの看護婦たちのある一部の層であることには留意が必要であろう。

10 1967年、当時滞在中の西ドイツから東ベルリンを訪問していた韓国人の学生17人が、KCIAによって誘拐、韓国に強制送還され、スパイ容疑で終身刑や死刑の判決を受けた「東ベルリン事件」が起きていた。

11 炭鉱労働者たちも、職場環境の改善や、職場選択の自由を求めストライキをおこなった例がある（Coi & Lee, 2005, S. 831）。

12 複数の女性たちが、韓国で1980年に起きた光州事件が政治的意識を高めるきっかけであったと述べている（Berner u.a., 2006, S.23, S. 41など）。また、この女性グループは、重要なテーマとして日本軍性奴隷の問題にも取り組んでいる（Berner u.a., 2006, S. 12）。

13 韓国ドイツ国交締結140年の記念としてKBS Worldドイツ語放送で製作された「特別インタビューシリーズ」の第4回のインタビューによる（KBS World German, 2023）。なお、このインタビューの後半では、Kim In-Sunと彼女の女性パートナーについてのドキュメンタリー映画『두사람（Life Unrehearsed）』（2022, 監督Jieun Banpark）、またKimが、韓国のLGBTQ運動にコミットメントする姿勢が紹介されている。

14 2014年には、ドイツにわたった炭鉱夫と看護婦の歴史を展示する博物館も作られている（Namhae German Village, n.d.）。

15 映画の終盤、Chun-jaが樹木葬墓地の具体的な計画を説明しながら、「ドイツに行った第一世代の私たちは死んだあとも一緒にいたい。（…）お墓の中で『ドイツは大変だったね』とおしゃべりをする」「ここが私たちの終着駅」、そして、「ここに私たちの墓地があれば、ドイツで労働をしてきた私たちの存在が永遠に残る」とも話している。また、Ahn（2019, p.169）は、元看護婦たちへのインタビューから、故国の土に埋葬されることを理由に帰国を希望する声を紹介している。

16 ちなみに、Chun-jaは、自分たちの希望がある程度反映されたドイツ村の生活に満足していると語っているが、ArminとLudwigは、当初の計画のいくつかが実現されていないことに対して、映画の中で不満を述べている。Schulz Zinda（2014, S. 217-218）も、特に医療や社会福祉システムの整備計画が理由の説明もなく実現されていないことを批判し、この帰国者集住のためのドイツ村というプロジェクトが、必ずしも当初の計画どおりに運営されていないことを指摘している。

17 映画の映像では、彼らの家の壁に子どもや孫と思われる家族の写真が飾られている。

【参考・映像作品】

Cho, Sung-Hyung (2009). *Endstation der Sehnsüchte.*

Cho, Sung-Hyung (2015). *Verliebt, verlobt, verloren.*

【参考文献】

Ahn, Yonson (2019). Here and There: Return Visit Experiences of Korean Health Care Workers in Germany. In Tsuda, Takeyuki & Song, Changzoo (Eds.), *Diasporic Returns to the Ethnic Homeland: The Korean Diaspora in Comparative Perspective* (pp. 161–176). Springer International Publishing AG. https://doi.org/10.1007/978-3-319-90763-5_9

Ahn, Yonson (2020). Nursing Care in Contact Zones. Korean Healthcare "Guest Workers" in Germany. In Yonson Ahn (Eds.), *Transnational mobility and identity in and out of Korea* (pp. 39-55). Lanham: Lexington Books.

Berner, Heike, Choi Sun-ju & Koreanische Frauengruppe in Deutschland (2006). *Zuhause: Erzählungen von deutschen Koreanerinnen.* Berlin, Hamburg: Assoziation A.

Bolzman, Claudio (2013). Ageing immigrants and the question of return: New answers to an old dilemma? In John Percival (Ed.), *Return Migration in Later Life: International Perspectives* (pp. 67-88). Bristol University Press. doi:10.46692/9781447301233.004

Chang-Gusko, Yong-Seun; Han, Nataly Jung-Hwa & Kolb, Arnd (Hg.) (2014). *Unbekannte Vielfalt: Einblicke in die koreanische Migrationsgeschichte in Deutschland.* Köln: DOMiD.

Choe, Jae-Hyeon & Daheim, Hansjürgen (1987). *Rückkehr- und Bleibeperspektiven koreanischer Arbeitsmigranten in der Bundesrepublik Deutschland.* Frankfurt am Main: Lang.

Coi, Sun-Ja & Lee, You-Jae (2005). Umgekehrte Entwicklungshilfe: die koreanische Arbeitsmigration in Deutschland. In Kölner Kunstverein (Hg.), *Projekt Migration* (S. 831-832). Köln: DuMont.

Garz, Detlef (2014). „Wir waren trotz der Schwierigkeiten fröhlich und mutig, weil wir von einem besseren Leben träumten": Die historische Entwicklung der südkoreanischen Migration in die Bundesrepublik Deutschland: Eine Skizze. In Chang-Gusko u.a. (2014), (S. 18-38).

Hartmann, Lisa (2016). Die südkoreanischen Migranten und ihre Integration in Deutschland. In Klaus Stüwe and Eveline Hermannseder (Hg.), *Migration und Integration als transnationale Herausforderung: Perspektiven aus Deutschland und Korea* (S. 125–152). Springer Fachmedien Wiesbaden. https://doi.org/10.1007/978-3-658-11645-3_8

Herbert, Ulrich (2001). *Geschichte der Ausländerpolitik in Deutschland: Saisonarbeiter, Zwangsarbeiter, Gastarbeiter, Flüchtlinge.* München: Beck.

Hinz-Wessels, Annette (2018). Gastarbeiter. In Stiftung Haus der Geschichte der Bundesrepublik Deutschland, *Lebendiges Museum Online.* 2018.1.17 http://www.hdg.de/lemo/kapitel/geteiltes-deutschland-modernisierung/bundesrepublik-im-wandel/gastarbeiter.html（2023年10月23日閲覧）

Hyun, Martin (2008). *Laulos-ja, Sprachlos- nein: Grenzgänger zwischen Korea und Deutschland.* Hamburg: EB-Verlag.

KBS World German (2023). 140 Jahre Koreanisch-Deutsche Beziehung. Episode 4. Gemeinsame Schritte. Interview mit Frau Kim In-Sun. 2023.6.20. http://world.kbs.co.kr/service/special_program.htm?lang=g&id=sub_index&board_seq=1539（2023.10.20 閲覧）

Kim, Gui Ok (2021). *Wie schmecken Sehsüchte? Eine Fallstudie zu den Bewohner*innen des „Deutschen Dorfes" in Korea.* Düren: Shaker Verlag.

Kim, Young-Hee (1986). *Sozialisationsprobleme koreanischer Kinder in der Bundesrepublik Deutschland.* Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Koreanische Frauengruppe in der BRD und Berlin West (1990). *25 Jahre koreanische Krankenschwestern in Deutschland.*（未出版シンポジウム資料）

Lee, You Jae (Hg.) (2021). *Glück auf! Lebensgeschichten koreanischer Bergarbeiter in Deutschland.* München: iudicium.

Luft, Stefan (2014). Die Anwerbung türkischer Arbeitnehmer und ihre Folgen. 2014.8.5. https://

www.bpb.de/themen/europa/tuerkei/184981/die-anwerbung-tuerkischer-arbeitnehmer-und-ihre-folgen/（2023年10月5日閲覧）

Namhae German Village (n.d.). http://남해독일마을.com/_(2023年10月20日閲覧)

Nestler-Tremel, Cornelius & Tremel, Ulrike (1985). *Im Schatten des Lebens: Südkoreaner im Steinkohlebergbau von Nordrhein-Westfalen. Eine Untersuchung zur Rotationspolitik mit ausländischen Arbeitsnehmern*. Heidelberg: FEST.

Park, Kyeyoung (2018). *The Korean American Dream: Immigrants and Small Business in New York City*. Ithaka: Cornell University Press,. https://doi.org/10.7591/9781501724558

Roberts, Suin (2010). Writing Zuhause: Identity Construction of the Korean-German. *Asian women 26, no. 4*, 27–59.

Roberts, Suin (2012). *Language of Migration: Self- and Other-Representation of Korean Migrants in Germany. New York*: Lang.

Roberts, Suin (2017a). The Gendered Migration Experience: South Korean Nurses in West Germany. In Joanne Miyang Cho & Douglas T. McGetchin (Eds.), *Gendered Encounters Between Germany and Asia. Transnational Perspectives since 1800* (pp. 195–211). Cham: Springer International Publishing.

Roberts, Suin (2017b). "Endstation der Sehnsüchte": Home-Making of Return Gastarbeiter Migrants. In Joanne Miyang Cho and Lee M Roberts (Eds.), *Transnational Encounters Between Germany and Korea: Affinity in Culture and Politics Since The 1880s* (pp.259-278). New York: Palgrave Macmillan.

Schäfer, Thomas (2014). Entwicklung und Perspektiven der Zusammenarbeit mit der Demokratischen Volksrepublik Korea. In Hartmut Koschyk (Hg.), *Garten der Freundschaft. Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft der deutsch-koreanischen Beziehungen* (S. 61-69). Reinbek & München: Lau-Verlag.

Schulz Zinda, Yvonne (2014). Das „Deutsche Dorf " in Namhae. Arbeiten in Deutschland, Altern in Korea. In Chang-Gusko u.a. (2014), (S. 212-222).

Statistisches Bundesamt (2022). Entwicklung der Studienanfängerquote in Deutschland von 2000 bis 2022. In Statista. 2022.11.30. https://de.statista.com/statistik/daten/studie/72005/umfrage/entwicklung-der-studienanfaengerquote/ (2023年10月16日閲覧)

Stolle, Christa (1990). *Hier ist ewig Ausland: Lebensbedingungen und Perspektiven koreanischer Frauen in der Bundesrepublik Deutschland*. Berlin: Verlag für Wiss. u. Bildung.

Yoo, Do-Jin (1975). *Die Situation koreanischer Krankenpflegekräfte in der BRD und ihre sozialpädagogischen Probleme*. Kiel.

Yoo, Jung-Sook (1996). Koreanische Immigranten in Deutschland. Interessenvertretung und Selbstorganisation. Hamburg: Kovač.

Yoon, In-Jin & Jeong, Young-Hun (2017). *The Korean Diaspora. A Sourcebook*. Seongnam: The Academy of Korean Studies Press.

Wee, Desmond (2018). Home Away at Home: Mediating Spaces of Tourism and Narratives of Belonging in the German Village of South Korea. In Sangkyun Kim & Stijn Reijnders (Eds.). *Film Tourism in Asia: Evolution, Transformation, and Trajectory* (pp. 221–237). Springer Singapore.